

四街道市大作岡No.2 遺跡採集遺物

島 立 桂・蜂 屋 孝 之・渡 辺 修 一

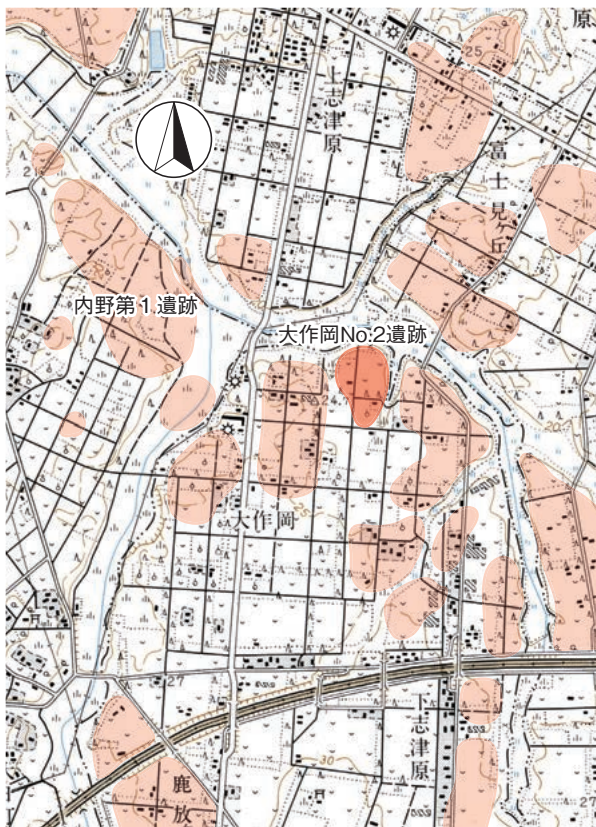
はじめに

ここに紹介する遺物は、四街道市在住だった故梶原義雄氏が、おもに畑の耕作中に採集し保管されていた遺物である。今回、梶原氏のご家族から、箱に納められた氏の採集遺物を実見させていただく機会があり、貴重な考古資料であることが判明した。ご家族の内諾を得て、本誌にその遺物を紹介させていただく。

採集された遺物のほとんどは、氏の耕作地から出土したものと考えられ、四街道市の西北端に位置する^{だい}大作岡No.2 遺跡の範囲にあたっている。採集品の大半は、縄文時代の石器からなるが、旧石器時代石器や紡錘車なども含まれている。

1 採集地点周辺の環境

大作岡No.2 遺跡が所在する台地は、四街道市域の西北端に位置し、北側は佐倉市と西側は千葉市花見川



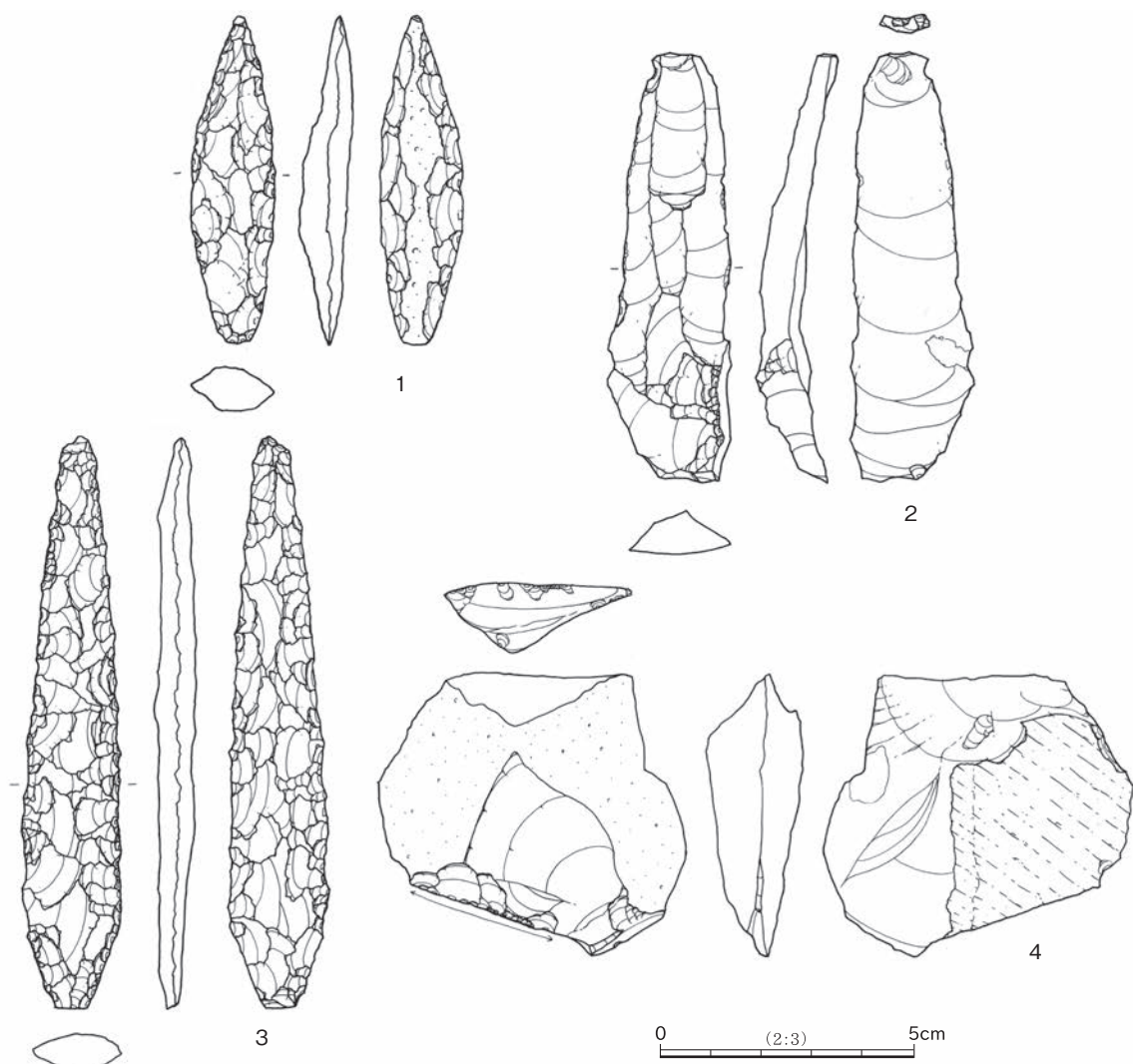
第1図 大作岡No.2遺跡の位置と周辺の遺跡
(国土地理院1:25,000「佐倉」)

区と接しており、標高25mの平坦な台地を形成している。四街道市のほぼ全域が印旛沼水系の谷によって開析されており、本遺跡はそのうちの1つである勝田川の上流部左岸に位置している。勝田川は本遺跡周辺部を源とし、千葉市稲毛区及び佐倉市と四街道市の境界部を流れ、かつては印旛沼へ注いでいたが、印旛沼の洪水対策を主目的とした新川（印旛放水路）が1969年に完成し、印旛沼と花見川河口が結ばれて、東京湾へ流れる河川へと変わっている。周辺の台地は、大部分は標高25m前後の樹枝状の開析が進んだ台地が多い。台地の地質は第四紀洪積世の海成層である下総層群を基盤層とし、その上に関東ローム層の武蔵野・立川ロームが堆積している。

勝田川流域の遺跡群は下流域では密度が濃い、大作岡No.2 遺跡周辺の上流域では、その密度はしだいに薄くなっていく。大作岡No.2 遺跡は、縄文時代及び中世の包蔵地とされているが、発掘調査は行われておらず詳細は不明であった。今回紹介する梶原氏の採集遺物から、遺跡の性格を知る手がかりを得られたことは重要である。勝田川流域の発掘調査の事例は少ないが、大作岡No.2 遺跡から下流約700mの左岸に位置する内野第1 遺跡は、大規模な集落遺跡として知られている。1990年～1996年に発掘調査が行われ、縄文時代後期～晩期を主体とする竪穴建物跡125棟、古墳時代前期～中期の竪穴建物跡311棟などが発見されている¹⁾。



写真1 遺跡周辺航空写真 (国土地理院 CKT20193-C5-18)



第2図 大作岡No.2遺跡採集石器(1)

2 旧石器時代から縄文時代草創期の石器 (第2図)

1は、暗褐色を呈するガラス質黒色安山岩を用いた中型両面調整で柳葉形の尖頭器である。先端部を若干欠損しているものの、ほぼ完形である。両面とも調整加工はやや粗く、横断面形は厚みのある凸レンズ状である。右面中央に自然面を残す。石材の安山岩は、凹凸のない自然面の形状から、県南を含む河川下流域よりもたらされた可能性がある。旧石器時代の終末期ないしは土器出現期に帰属すると考えられる。

2は、灰白色の地に、直径2mmほどの橙色がかった斑が入る玉髓を用いた、やや大型の石刃である。下半部に石器の長軸方向に直交する稜形成の剥離痕があり、発達した石刃技法が窺われる。上半部の鋭利な両側縁には、刃こぼれが見られる。この石器は、表面採集資料であることから、立川ローム層Ⅲ層～Ⅴ層の範囲で考えると、帰属時期の候補として、砂川期石器群、東内野型尖頭器石器群、神子柴系石器群の3者のいずれかの可能性があるが、玉髓を多用する点から、砂川

期が最も蓋然性が高い。

3は、暗褐色で硬質緻密な東北産頁岩による尖頭器である。先端から基部にかけて両側縁が直線状に開き、基部は逆三角形に作り出されている。表裏両面は細かく調整され、横断面形は均整のとれた凸レンズ状を呈する。先端と基端部がわずかに欠損する。この石器は、かつて芹沢長介が新潟県本ノ木遺跡を発掘調査し、報告した際にD形(芹沢ほか1957 第3図6)に分類し、その後、有舌尖頭器の初期に位置付けたものに該当する(芹沢 1966)。千葉県内では、富里市南大溜袋遺跡や柏市元割遺跡に代表される、狭長で両側縁が平行し、横断面形が丸みをもった凸レンズ状の「本ノ木型尖頭器」が数多く見られるが、本資料は、同時期ではあるものの、別形態と考えられる。類例は、千葉市バクチ穴遺跡、八千代市役山東遺跡など、わずかである。

4は、自然面は黄褐色、内部は灰褐色で珪化度の高い頁岩を用いた削器で、幅広で不整形の剥片端部に調整痕が見られる。帰属時期は限定できない。

3 縄文時代の石器（第3図・第4図）

石鏃及び石鏃未製品が主体である。石材はチャートが最も多く、次いで黒曜石、玉髄、頁岩が続く。石鏃チップ等は含まれないが、それは整った石鏃を中心に採集されたためと推測される。それでも未製品が一定程度含まれることから、遺跡内で石鏃の製作が行われていた可能性は高いと思われるが、個々の詳細な採集地点が記録されておらず、土器が採集されていないので、帰属時期の推定も難しい。

石鏃の形態で最も多いのは、平基または凹基でも基部の挟りが浅く、長幅比が大きいものである。仮にA類とする。5～15がそれらで、長幅比は2:1から5:3である。また、尖頭部端を欠損するが、19も同種のものと推定される。全体に比較的整った二等辺三角形を呈するが、7と14については両側縁に段をもっている。段部分の突出程度はあまり顕著ではないものの、両側縁ともにほぼ線対称を示すので、意識的に整形されたものと考えられる。これらの石材は、5が玉髄、側縁に段をもつ7と14が頁岩、8が黒曜石、19が安山岩で、他はすべてチャートである。石材からみても、7と14は別に分類されるべきかもしれない。

16～18及び20～23は、平基または凹基でも基部の挟りが浅く、長幅比が小さいものを集めた。仮にB類とする。長幅比は4:3から1:1に収まる。また33は4:3よりもやや長幅比が大きく、A類とB類の中間に当たるが、これも基本的に同分類としてよいであろう。17は尖頭部表面（左面）が一旦折損しており、その後裏面（右面）に細かい再加工を加えている。その結果、先端が丸みを帯びており、長幅比も小さくなっている。20は尖頭部が鈍く、全体としてずんぐりした形状になっているが、この石器についても尖頭部折損後の再生の結果である可能性がある。これらの石材は、18・22が黒曜石、20が頁岩、他は33を含めてチャートである。

24～32は、凹基石鏃のうち基部の挟りが深いものである。仮にC類とする。うち24～27、30～32は基部の挟りで形成された脚部が「ハ」字状に開くもので、28・29はより深い挟りの結果、脚部が下方へ直線的に伸びる「長脚」形状を示す。A類のような大きな長幅比を示すものはないが、B類よりもやや長幅比の大きいものはある。30は長幅比は小さいが、両側縁に7に類似する段が認められる。31は尖頭部を折損し、右脚部全体も折損している。32も同様に尖頭部と右脚部を折損するが、脚部の折損時に右側縁の広い範囲に欠損が

及んでいる。石材は、26が玉髄、30が頁岩、32が黒曜石で、他はすべてチャートである。両側縁に段をもつ30が7・14と同様頁岩製であることは興味深い。

34・35はともに黒曜石製の、36は頁岩製の平基または挟りの浅い凹基石鏃であるが、いずれも尖頭部側を折損しており、A類、B類のいずれに分類されるか明確ではないが、おそらく35はA類、36はB類であろうと推定される。

37は、今回の報告資料で唯一の有茎石鏃である。仮にD類とする。石材はチャートで、全長は30mm弱であるが、鏃身部は細身の菱形を呈し、茎を除く身の長さが23mm程度の小型品である。一部に階段状剥離のようにみえる箇所があるが、それは節理面に当たったため、調整加工は両面とも精緻である。

38～41は石鏃未製品である。38は玉髄製である。基部側を打面とした剥片を素材とし、裏面の一部に主要剥離面を残している。調整加工は背面側の側縁部を中心に加えられているが、この時点でかなり小型品であるため、製作途中で放棄されたものと考えられる。39はチャート製である。尖頭部側に打面をもっていた剥片素材で、腹面側にはほとんど加工が認められない。背面側の上部（尖頭部？）と右側縁に加工が認められるが、左側縁の末端寄りがあまりに薄く、初期段階で放棄されたものと思われる。40は玉髄製である。平面形状は整った二等辺三角形にみえるが、現状の大きさに対してかなり厚さがある。図で表面とした側が素材剥片の腹面で、下縁を打面とし、打瘤の膨らみを大きく残している。両側縁に整形のための加工が加えられているが、剥離角は大きく、側縁を薄く加工することが不可能と判断されたために放棄されたのであろう。41も玉髄製である。貝殻状剥片を素材とし、打面を大きく残したままである。打面と末端を結ぶ方向で両極打法を使い側縁部の作出を試みている。38～40に比較すると断面形状は整いつつあるが、打瘤の膨らみはまだ大きく、対称形に仕上げるのが難しいと判断された可能性がある。

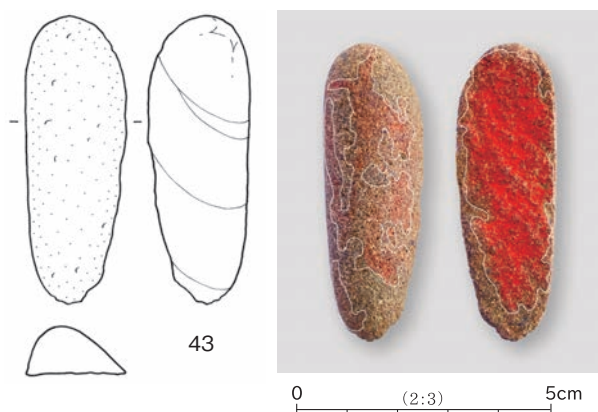
42は、粘板岩質ホルンフェルス製の、分銅形打製石斧（土掘具）である。上端を折損している。側縁中央付近は大きめの剥離によって深く括れており、側縁部と剥離面の稜上、表面の高い平坦部などに紐擦れによると考えられる摩耗が観察される。刃部には比較的細かい剥離が連続するが、刃部の擦痕、摩耗痕は明瞭ではない。打製土掘具としては小型で、括れの深さとも併せて、再生を繰り返した結果とも考えられる。



第3図 大作岡No.2遺跡採集石器(2)

第1表 大作岡No.2遺跡採集石器計測表

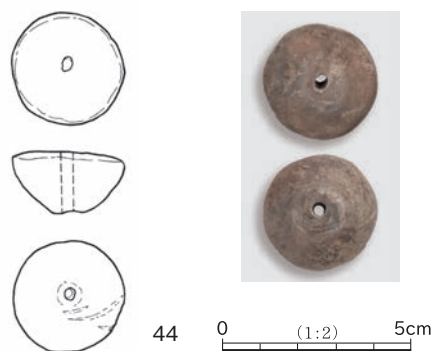
挿図	写真	番号	遺物 番号	器 種	石 材	計測値 (mm・g)				備 考
						最大長	最大幅	最大厚	遺存重量	
3	5	5	001	石鏃	玉髄	28.6	15.5	5.5	1.52	A類
3	5	6	002	石鏃	チャート	30.2	14.9	5.5	1.98	A類
3	5	7	003	石鏃	頁岩	28.1	16.8	4.1	1.30	A類
3	5	8	004	石鏃	黒曜石	28.1	15.2	3.8	1.27	A類
3	5	9	005	石鏃	チャート	27.2	14.9	3.9	1.16	A類
3	5	10	006	石鏃	チャート	26.5	15.0	4.8	1.20	A類
3	5	12	007	石鏃	チャート	24.3	14.2	3.1	0.80	A類
3	5	11	008	石鏃	チャート	22.2	12.6	4.7	0.87	A類
3	5	13	009	石鏃	チャート	32.4	16.4	5.2	1.87	A類
3	5	14	010	石鏃	頁岩	23.5	12.0	3.2	0.75	A類
3	5	15	011	石鏃	チャート	20.3	12.7	4.9	0.88	A類
3	5	16	012	石鏃	チャート	19.9	14.8	2.7	0.69	B類
3	5	17	013	石鏃	チャート	27.0	21.2	3.4	1.81	B類
3	5	18	014	石鏃	黒曜石	16.4	13.0	3.0	0.39	B類
3	5	19	015	石鏃	安山岩	17.7	14.5	3.9	0.88	A類か
3	5	20	016	石鏃	頁岩	17.1	15.0	4.4	0.97	B類
3	5	21	017	石鏃	チャート	19.5	14.5	4.0	0.69	B類
3	5	22	018	石鏃	黒曜石	20.2	19.8	3.4	1.10	B類
3	5	23	019	石鏃	チャート	21.8	14.8	4.8	1.11	B類
3	5	24	020	石鏃	チャート	25.0	18.0	4.0	1.20	C類
3	5	25	021	石鏃	チャート	26.0	20.0	5.0	1.36	C類
3	5	26	022	石鏃	玉髄	23.2	16.9	3.1	0.91	C類
3	5	27	023	石鏃	チャート	20.0	13.0	4.8	0.78	C類
3	5	28	024	石鏃	チャート	20.0	13.8	4.1	0.68	C類
3	5	29	025	石鏃	チャート	12.2	21.0	3.4	0.48	C類
3	5	30	026	石鏃	頁岩	18.5	15.4	4.0	0.70	C類
3	5	31	027	石鏃	チャート	29.0	19.7	4.3	1.51	C類
3	5	32	028	石鏃	黒曜石	28.0	18.6	5.0	1.69	C類
3	5	33	029	石鏃	チャート	21.2	13.3	5.0	1.10	B類か
3	5	34	030	石鏃	黒曜石	14.3	16.2	3.5	0.77	
3	5	35	031	石鏃	黒曜石	19.0	18.0	4.6	1.19	A類か
3	5	36	032	石鏃	頁岩	13.0	15.0	3.8	0.55	B類か
3	5	37	033	石鏃	チャート	29.5	11.5	3.5	0.82	D類 有茎石鏃
3	5	38	034	石鏃未製品	玉髄	14.5	17.3	5.6	1.32	
3	5	39	035	石鏃未製品	チャート	19.4	19.8	4.6	14.80	
3	5	40	036	石鏃未製品	玉髄	21.8	17.8	10.5	3.43	
			037	剥片	頁岩	13.0	12.5	7.0	0.68	旧石器～草創期か
3	5	41	038	石鏃未製品	玉髄	27.5	22.8	7.8	4.53	
			039	剥片	玉髄	12.8	9.5	4.2	0.31	
			040	剥片	珪質頁岩	22.0	24.0	6.0	2.54	旧石器～草創期か
			041	剥片	黒曜石	21.2	25.0	9.0	3.39	
			042	剥片	チャート	19.5	8.8	4.0	0.73	自然礫の可能性あり
3	5	42	043	打製石斧	ホルンフェルス	83.2	83.9	17.1	122.58	分銅型
2	5	3	044	尖頭器	頁岩	110.4	20.0	8.6	18.65	草創期
2	5	1	045	尖頭器	ガラス質黒色安山岩	65.0	16.5	10.2	9.20	旧石器～草創期か
2	5	2	046	石刃	玉髄	56.1	61.0	19.0	53.70	旧石器
2	5	4	047	削器	頁岩	85.0	24.5	15.8	18.98	旧石器か
			048	剥片	頁岩	35.0	19.3	19.0	5.47	旧石器～草創期か
4	(4図)	43	049	剥片	砂岩	57.7	20.0	9.8	14.29	赤色顔料顕著に付着
5	(5図)	44	050	石製紡錘車	頁岩または泥岩か	29.5	29.5	16.0	12.39	古墳時代～古代
6	(6図)	45	051	石鏃	チャート	19.2	15.0	14.0	0.81	B類



第4図 大作岡No.2 遺跡採集石器(3)

43は砂岩製で、長楕円形の礫を縦に割った剥片であるが、表裏ともに赤色顔料の付着が認められ、とくに裏面（主要剥離面）への付着が顕著である。裏面は平坦であるが、細かいリングの波があり、その浅い凹部に多量に入り込んでいる。このことから、裏面を使って、顔料（焼いたベンガラか？）をすりつぶす用途に用いられた石器である可能性が想定される。

一方、表面への付着は薄く一様ではない。これは、表面が平滑な原礫面であるという理由もあるかもしれないが、使用時に握った手指から偶然付着したことが想定される。なお、第4図右の写真は、彩度を高めて顔料の付着状況を強調し、さらに顔料付着範囲を白線で示した。



第5図 大作岡No.2 遺跡採集石製紡錘車

4 紡錘車（第5図）

石製紡錘車が1点採集されている。直径が29.5mm、厚さ16.0mmという小型品で、石材は頁岩あるいは泥岩かと思われる。特徴が乏しく、時代を限定することはできないが、石製品であることから、古墳時代から古代の範囲で考えることが妥当と思われる。

5 大作岡No.2 遺跡採集資料の意義

以上、故梶原義雄氏が採集された資料を報告した。梶原氏の興味の主な対象が、尖頭器や石鏃にあったこ

とから、それらが主体となったと思われるが、縄文時代の石器が多く採集されており、詳細な時期を明確にできないものの、遺跡内での石鏃製作を伴う集落跡が存在することは疑う余地がない。

また、旧石器時代から縄文時代草創期の石器が採集されていることも重要である。耕作中の採集であるため、ソフトローム層中かその上部に包含されるものであろうが、いくつかの異なる時期の所産と思われる石器が含まれている。本遺跡の周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、2.5km北方には南志津地区遺跡群が、同じく2.5km東方には内黒田地区遺跡群とさらに東方に物井地区遺跡群が、6 km北西には萱田地区遺跡群が所在する。大作岡地区の立地は、各遺跡群の立地環境とも似通っており、この地に旧石器時代の遺跡があることは確実視される。

大作岡地区は、近傍で内野第1遺跡が調査されているとはいえ、これまで考古学的知見が乏しかった。表面採集資料ではあるが、貴重な情報を追加することができたと考えている。

注

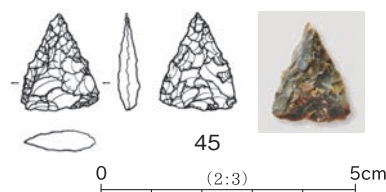
- 1) 千葉市文化財調査協会 2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』

参考文献

- 栗島義明 1991「有茎尖頭器の起源」『利根川』12、6-12頁
 芹沢長介・中山淳子 1957「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』2、1-19頁
 芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』2、1-67頁
 千葉県 1980『国土調査 土地分類基本調査（佐倉）』
 橋本勝雄 2012「本ノ木型尖頭器総論－槍と植刃器のかかわり」『研究紀要』第9号、1-30頁、財団法人印旛郡市文化財センター

付記

脱稿後、石鏃1点が第3図及び第1表に漏れていたことが判明したため、遺物番号を051として実測図・写真を第6図に掲載し、計測値を第1表の末尾に追加した。石材はチャートで、本稿での分類ではB類に相当する。



第6図 大作岡No.2 遺跡採集石器(4)

写真2 遺跡現況（南から）
(2025年1月24日)
現状は果樹園（梨園）及び畑である



写真3 遺跡現況（北から）
(2025年1月24日)
道路からの目視では遺物散布は少ない



写真4 遺跡現況（西から）
(2025年1月24日)
西に隣接する大作岡No.3遺跡から
周辺では、大作岡No.3遺跡が一段高く、本遺跡との比高差はおおよそ2mである





写真5 大作岡No.2遺跡採集遺物（旧石器時代～縄文時代）